

# 地域住民のアイデンティティ形成と葛藤が祭礼 の継承に果たす役割

倉田健太\*  
k.k.asixkl@gmail.com

## <目次>

- |                        |                     |
|------------------------|---------------------|
| 1. はじめに                | 3.2 祭礼の活性化と望ましい姿の提示 |
| 2. 「さぬき豊浜ちょうさ祭」の概略     | 4. 「五十鈴會」による新たな試み   |
| 2.1 分析視角の設定            | 4.1 五十鈴會の沿革と活動の展開   |
| 2.2 さぬき豊浜ちょうさ祭の変遷      | 4.2 望ましい祭礼の追求       |
| 3. 「豊浜ちょうさ祭を盛り上げる会」の活動 | 5. おわりに             |
| 3.1 盛り上げる会の活動履歴        |                     |

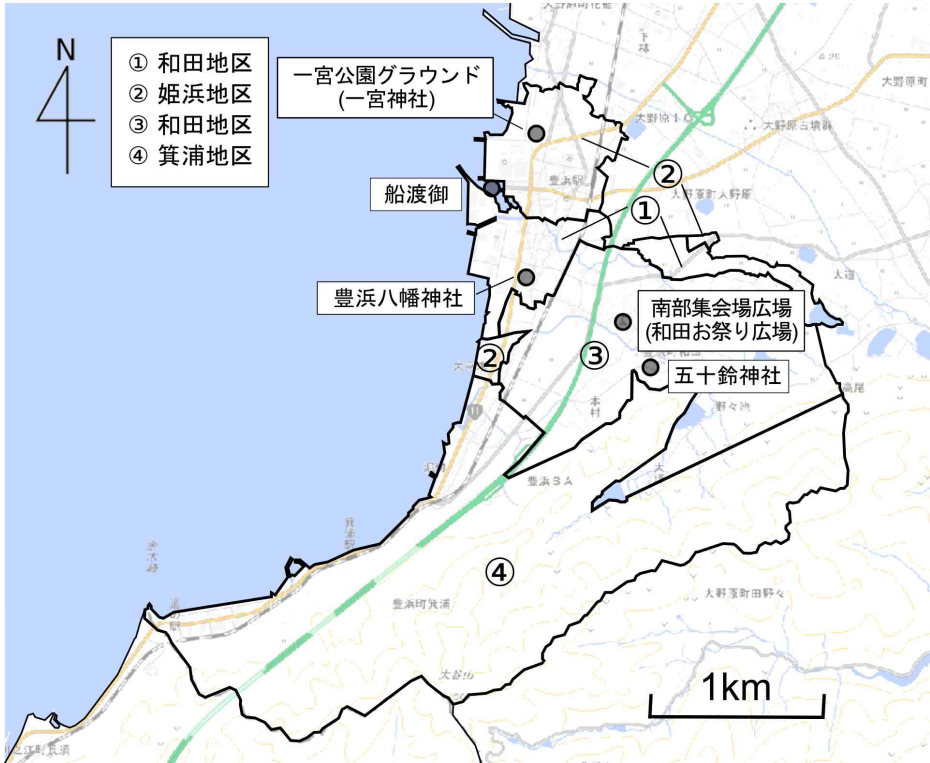
主題語: 地域アイデンティティ(Local Identity)、テイスト(Taste)、ちょうさ(Chosa)、盛り上げる会(Moriageru kai)、五十鈴會(Isuzu kai)

## 1. はじめに

日本の祭礼における実践形式の一つに、2016年、ユネスコ無形文化遺産に登録された「山・鉦・屋台行事」がある。本稿では、山・鉦・屋台のうち「屋台」を使用した祭礼となる、香川県観音寺市豊浜町(旧・香川県三豊郡豊浜町)に位置する豊浜八幡神社で、例年10月第2週末(金、土、日曜)に行われる例大祭、通称「さぬき豊浜ちょうさ祭」を事例にとりあげる(＜図1＞)。とくに1980年代以降、同祭礼の活性化を目指す取組みを進めてきた豊浜町内の祭礼運営組織の活動方針に着目し、戦後の祭礼の変遷と継続に対し、組織的な活動が与えた影響を分析する。この作業は、運営組織が描いてきた実践を通して、祭礼の持続可能性に働きかける要因を探求することを目的としており、そこから継承戦略の一端を明らかとすることに、本稿の意義を求められる。

\* 総合研究大学院大学 文化科学研究科 博士後期課程

1) 本稿の事例となる「さぬき豊浜ちょうさ祭」は、「ちょうさ(太鼓台)」を使用する。植木行宣の分類にしたがえば、ちょうさは山・鉦・屋台のなかで「太鼓屋台」(植木 2001: 309)と呼ばれる分類に属する。



＜図1＞ 香川県観音寺市豊浜町の範囲と地区構成(筆者作成)

本稿で対象とする運営組織は、1989年、豊浜町を単位に発足した「豊浜ちょうさ祭を盛り上げる会<sup>2)</sup>」と、豊浜町に属する和田地区で2007年から活発な活動を展開する「五十鈴會」の二団体である。筆者は、過去に同祭礼を調査したなかで、「ちょうさ(太鼓台)」と呼ばれる屋台に変化を加えるとき、従来の様式を継承する観点から「讃岐型」という境界意識が働くことを指摘した(倉田 2017: 48)。以下で照準する運営組織の活動がもたらした、さぬき豊浜ちょうさ祭の変遷がもつ特徴を分析する試みも、その延長にある。

先に論点を提示すれば、まずは盛り上げる会による祭礼の活性化の一策で、1987年から確認できる、さぬき豊浜ちょうさ祭の名称を地域内外に推しだす動きがあった。その過程で、担い手を含む地域住民は、豊浜町の「地域アイデンティティ(Local Identity)<sup>3)</sup>」を同祭礼

2) 盛り上げる会をとりあげる箇所でも述べるが、同会の前身的な活動は、1959年から豊浜町内の有志によって、すでにはじめられていたという。

3) 「地域」の翻訳では、地域の固有性や特徴を表現するときLocalを採用する傾向がある。たとえば、『人文地理学事典』の項目「郷土」で、「郷土的個性」や「地域らしさ」を説明するなかで使われる「地域アイ

に定めていく。そして祭礼自体にも「豊浜の祭り」という実践上での良さを追求する意識、すなわち「テイスト(Taste)<sup>4)</sup>」が浮上し、地域外の様式とみなされる型との緊張関係が生じる。五十鈴會の活動は、和田地区という小単位の地域アイデンティティを強化し、そこから祭礼の新たな実践形態を発信することで祭礼を活気づけてきたが、それはテイストの差異をより顕在化させることにもなった。

以下では、この二つの分析視角にもとづき、筆者が2016年6月から2019年4月にかけて実施したフィールド調査のデータ<sup>5)</sup>から、三節を立てて論じていく。第一に、なぜ今述べた分析視角が必要なのかを、同祭礼とそれをとりまく環境を踏まえつつ説明し、議論の道筋を示す。第二に、1980-90年代にかけて祭礼の活性化を推進した、盛り上げる会の果たした役割を、その前身集団による活動から確認する。第三に、2000年代以降に発足した五十鈴會が、「見せる」ことをキーワードとする新たな取組みを展開していく様子をとりあげ、それぞれの運営組織がもつ特徴と祭礼への影響を検討する。

## 2. 「さぬき豊浜ちょうさ祭」の概略

### 2.1 分析視角の設定

ここからの作業に必要な概念が、先述した「地域アイデンティティ」と「テイスト」である。まず、地域アイデンティティは、別稿において定義した「重層性を保ち、加えつつ絶えず変容していく意識」(倉田 2019: 155)を捉えるうえで重要となる。というのも、盛り上げる会が「さぬき豊浜ちょうさ祭」の名称を定着化させる時期と、その定着後となる五十鈴會の活動時期では、異なる地域アイデンティティの層が地域住民に形成される様子が確認でき

---

デンティティ」はLocal Identityと訳される(濱田 2013: 312-313)。本稿で、地域アイデンティティを用いて論じる内容も、同様の意味に連なるため、Local Identityを地域アイデンティティの訳語と位置づけ、考察を行っていく。

- 4) 本稿に即していえば、テイストは「趣味の良し悪し」という意味での「趣味」になる。ピエール・ブルデューが「趣味(すなわち顕在化した選好)とは、避けることのできないひとつの差異の実際上の肯定」(Bourdieu 1979=1990: 88)と述べる概念で、祭礼の変遷上で浮上する「テイストの差異がそもそも人びとを分割するほどの注目に値すべき差異としてあつかわれるか」(岡澤 2017: 33)どうかという点からも、考察を加える。
- 5) 盛り上げる会と五十鈴會、両運営組織の会則、議事録等の文書記録や、地域住民への聞きとり、また実際の祭礼の観察によって得られたデータとなる。

るためである。

名称と地域アイデンティティの関係については、文化人類学者のマシュー・エンゲルが「名前の強調はアイデンティティに迫る一般的な方法」(Engelke 2017: 182)と指摘した点に加えて、野入直美が「特定の地域の独自性を表す集合的表象」(野入 2017: 449)とした、地域アイデンティティの定義が参考になる。次節であつかう、盛り上げる会の活動方針の一つに、祭礼の対外的な発信をあげられるが、それによって豊浜町は、さぬき豊浜ちょうさ祭の舞台とみなされていき、地域住民は祭礼実践のありかた、いいかえれば、豊浜の祭りの望ましい姿を意識するようになったと述べるができる。

続けて、増田研が長崎くんちの調査上で「アイデンティティの層が重ね合わされている点に特徴がある」(増田 2014: 41)と指摘した箇所からは、地域アイデンティティに重層性が備わっていることがわかる。また、宮本節子と古川典子は「その地で生きる」個人の実感と捉え、単に所属しているという知識ではなく……自己肯定的な感情、発展的な感情を含めた概念」(宮本・古川 2007: 84)と定義し、個人から地域の一員を志向する住民の意識変化を考察している。地域アイデンティティに内包された、この感情的な側面と重層性は、豊浜町に属する和田地区を単位に発足した五十鈴會をみるうえで重要になる。五十鈴會発足の動機は、さぬき豊浜ちょうさ祭という営みのより望ましい姿の追求にある。そのために、和田地区という小単位で親睦と発展を企図した取組みを展開し、連帯感の強化をはかるが、この過程は、金賢貞が「変化の可能性を秘めた現在形のもの」(金 2013: 260)が地域アイデンティティだと述べた点に合致する。

次に、テイストも本稿の主要な論点に迫る概念である。テイストについて、北田暁大の説明を引用すると、たとえば、読書や音楽鑑賞といった「趣味 hobby」の受容実践に現れる「趣味 taste」(北田 2017: 51)のことで、表現を変えるならば「選好」という言葉が該当する。冒頭に指摘した、讃岐型という境界意識もそうだが、祭礼実践上にはとかく「趣味の良し悪し」の判断(選好)が働く。当地の場合、さぬき豊浜ちょうさ祭という名称が確立して以降、どのようにちょうさを用いることが望ましいのかをめぐる地域住民の見解の差が、より顕著になったものと考えられる。

それを踏まえて、近年の民俗学領域における議論をとりあげると、俵田悟が「審美の基準」として、「あるものを「良い(悪い)」と感じる心意の表れ」(俵田 2017: 441)から民俗芸能を論じ、また三隅貴史は、現在の東京周辺地域の神輿会がもつ「江戸前」の美学、すなわち「理想の表現に関する美的感覚」の成立過程を論じている(三隅 2017: 98)。これらは、本稿で用いる分析視角と、基調を同じくするものであろう。

ちょうさを使用する際の動作やかけ声は、昔から伝承されてきた表現か否か、つまり豊浜町の伝統的な身体技法を争点とするせめぎあいが、盛り上げる会、五十鈴會の活動を経た現在もみうけられる。そこでは、望ましい姿に対する地域住民の葛藤がまさに浮き彫りになっている。この点については三隅が、現代日本の祭礼にいくつかの支配的な美学が並存していると指摘した状況が大きく関係することには留意したい(三隅 2017: 119)。豊浜町も含め、ちょうさ(太鼓台)を使用する祭礼では、愛媛県東予地域、とりわけ新居浜市・新居浜太鼓祭りの実践に支配的な美学を確かめられるからだ<sup>6)</sup>。本稿の議論に置きかえると、愛媛県の表現、すなわち「愛媛型」が豊浜町に流入することで、讃岐型という従来の表現を良しとするテイストが喚起されている現状があり、それが運営組織の活動の過程から看取できる。

そして、この愛媛型という外部を住民間に意識させる要因が、祭礼実践を通して当地で形成されてきた地域アイデンティティとなる。竹沢尚一郎によれば、祭礼が社会統合を果たすという議論は、エミール・デュルケーム以来、祭礼研究上で一つの基調をなしてきた(竹沢 1999: 81)。当地の祭礼も、同様の志向性をそなえたものといえる。ただ、そこには望ましい姿をめぐる、テイストという概念に関連する先行研究が示す、葛藤的な営みもまた生じている。したがって以下の議論では、社会統合的な観点だけでは把握しきれない祭礼実践および継承の現在を明らかにするうえで、地域外からの身体技法の導入やそこに発生する住民間の見解を重視する戦略を採用しているが、この点に研究上の独創性を主張できよう。

あわせて、さぬき豊浜ちょうさ祭の調査にいたった経緯も説明しておきたい。同祭礼は、そこにだされるちょうさの台数をもって、香川県下でも大規模な祭礼の一つに数えられ、その台数の増加にともない運営体制も整備されてきた。そのため当初は、こうした運営体制の整備が祭礼にもたらす影響のうち、地域の結束とそれによる継承のありかたの把握を目的とするフィールドワークを展開した。だがその過程で、今述べた地域住民の結束や祭礼の継承にあたる、愛媛型の流入がもつインパクトが次第に浮上してきた。そこで本研究では、豊浜町における運営組織の活動が、どのように住民の地域アイデンティティを形成していったのかに加えて、当地で愛媛型が流入した具体的な状況と、それが従来の讃岐型とどう区別されているのかという点を調査上の課題として追加、検証する方針をとっている。

6) たとえば、香川県坂出市で使用される太鼓台(ちょうさ)は、その造形とともに、今述べた身体技法もあわせて新居浜市から伝わった型をとりいれている(倉田 2016: 42)。

## 2.2 さぬき豊浜ちょうさ祭の変遷

ここからは、さぬき豊浜ちょうさ祭の変遷を、それをとりまく環境の変化とあわせて概観する。まず、盛り上げる会と五十鈴會に関わる主な出来事を年表化し、提示しておく(<表1>)。

<表1> さぬき豊浜ちょうさ祭に関する年表(1989年以降)

年次	出来事
1989	豊浜ちょうさ祭を盛り上げる会 発足
1993	ちょうさ会館 開館
1994	サンメッセ香川・国民文化祭みえへのちょうさ派遣
1995	御堂筋パレードへのちょうさ派遣
1997	国民文化祭かがわへのちょうさ派遣
2003	さぬき豊浜ちょうさ祭実行委員会 発足
2005	和田イベント実行委員会 発足
	祭礼期日を現在の第2週末に固定
	観音寺市との合併
2007	五十鈴會に改称(和田イベント実行委員会)
	合同寄せ担きの披露
2009	五十鈴神社への合同参拝の実施
2017	実行委員会への一元化(盛り上げる会)

(筆者作表)

冒頭で述べたように、さぬき豊浜ちょうさ祭とは、例年10月第2週末(金、土、日曜)に行われる、豊浜八幡神社秋季例大祭の通称である。同社の氏子区域は、<図1>に示した四地区のうち、和田浜、姫浜、和田の三地区が相当し、箕浦地区は神田神社を氏神とする。ただし1990年以降、神田神社は豊浜八幡神社の兼務社となっており、今では箕浦地区のちょうさも豊浜八幡神社境内に入場し、神輿渡御にも参加している。日程を確認すると、1938年には正祭式を14日とする10月13、14、15日の三箇日であった。だが、ちょうさの担ぎ手不足を理由に、人の集まる週末開催を望む声が地域内で高まり、2001~04年にかけて、第2週もしくは第3週末で模索、05年から現在の第2週末に固定した経緯がある。

その舞台となる豊浜町は、<図1>にも示したように、和田浜、姫浜、和田、箕浦の四地区から成立しており、計23台のちょうさがでる。そのため、香川県下でも「太鼓台が一つの神社としては最も多く出ること有名」(香川県教育委員会編 2000: 16)な祭礼である。このちょうさは、高さ約5メートル、重さ約2トン、担ぎ手には100人を要する構造で(豊浜町 1992: 33)、これを曳きまわす、または差しあげる演技で祭礼を賑やかす(<図2>、<図3>)。

このちょうさに類似した屋台は、屋台の構造や飾り幕の分布の調査から、瀬戸内海沿岸地域で集中的に確認できる(観音寺太鼓台研究グループ編 2013)。そして、当地のちょうさの構造に近い屋台は、香川県西讃地域から愛媛県東予地域にかけて多く分布しており、そのなかで屋台の流通や身体技法の伝播という観点から、三隅が支配的な美学と述べる中心点をたどるとき、それが愛媛県新居浜市に定められることは先述した<sup>7)</sup>。



<図2> 氏詣(氏参り)を行うちょうさ(長谷ちょうさ：筆者撮影)



<図3> 一宮公園グラウンドでの演技(道溝ちょうさ、差しあげた後に真上に放り投げる演技を行っている：筆者撮影)

7) 筆者は、戦後の変遷をあつかっているため、その時期の物質、技法に関する中心地として、新居浜市を採用する立場をとっている。一方、観音寺太鼓台研究グループの代表となる尾崎明男氏は、前近代、近代といった時代を踏まえ、職人の集積という観点から、その中心地を観音寺一帯と論じる立場となる。この場合、いずれが正しいというよりは、中心点が論述上の時代設定によって動く場合もあると考えることが適切だと思われる。

祭礼中のちょうさの役割は、豊浜八幡神社の氏子区域を巡行する神輿のお供となる。この運行上の日程を簡潔に確認すると、一日目は氏詣(氏参り)という、ちょうさの安全祈願が行われる。二日目には正祭式がある。神輿は、豊浜八幡神社が所在する和田浜地区から東進し、和田地区の御旅所となる南部集会場広場(和田お祭り広場)で神事をとり行ったのち、そこで宿泊する。三日目は、和田地区から豊浜港へと西に進み、和田浜地区から姫浜地区への船渡御を経て、一宮神社(一宮公園グラウンド)にもうけた御旅所で神事を行い、その後豊浜八幡神社での還幸祭をもって終了する。

二日目から行われる神輿渡御は、氏子区域となる豊浜町内を、氏神を乗せた神輿がまわり、地域住民の幸福を願う儀礼となる。そのお供となる各地区のちょうさは、二日目以降の神輿の移動にしたがって運行されるのだが、このちょうさの運行とは、担い手にとって純粋な楽しみを見出す場でもある。神輿が動かない時間帯の各ちょうさは、それを保有する自治会内での運行や、御旅所となる和田お祭り広場や一宮公園グラウンドを会場として合同運行を催す。神事とは別に、担い手たちの自己充足的な営みがあって、先ほど述べた第2週末への日程変更も、この文脈下で行われたことだといえる。

そして今日、神輿渡御時のちょうさ運行や会場で催す合同運行の場面を対象とする運営組織の統制は、祭礼を円滑に進めるうえで必要不可欠になっている。とりわけ全23台がどう一宮公園グラウンドは、さぬき豊浜ちょうさ祭のなかでも、いわば晴れ舞台と位置づけられている。だからこそ、運行時間や入退場を各ちょうさに遵守させ、その演技を「見せる」場とすることが求められてきたわけである。

こうして立ちあげられたのが、次節で論じる盛り上げる会となる。その発足時期は1989年で、竹下登内閣が「自ら考え自ら行う地域づくり事業(ふるさと創生事業)」を展開した年に重なる。そこで、発足当初の盛り上げる会の活動目的では、その事業を活用したちょうさ会館の建設が明記され、その後、実寸大のちょうさをはじめ、祭礼に関する展示を専門に行う施設として93年に開館する<sup>8)</sup>(<図4>)。地域づくりという発案に祭礼が結びつくことはめずらしい話ではない。新居浜市でいえば、祭礼の観光推進を一つの目的に、新居浜市太鼓祭り推進委員会という会合の場が71~72年にかけて整備されている(倉田 2019: 160)。当然、豊浜町においてもさぬき豊浜ちょうさ祭の活用が目指された。

8) 付言すれば、当時の瀬戸内海沿岸地域でも、祭礼に特化した展示施設はみられなかったようである。この点について、1998年に新居浜市で開催された「平和な太鼓まつりシンポジウム」内で、同地域の祭礼に精通する成願寺整は、太鼓台に関する展示施設として闡明をつけたとちょうさ会館を評している(新居浜市 1998: 42)。



そして90年代は、香川県内外の祭典にちょうさを派遣し、さぬき豊浜ちょうさ祭の名称を推しだす動きが盛んな時期であった。主だった参加行事には、94年はサンメッセ香川(香川県産業交流センター)オープニングイベントと、三重県での第9回国民文化祭みえ94、翌95年の大阪市で催された御堂筋パレード、97年の第12回国民文化祭かがわ97をあげられる。これらの祭典に派遣し、さぬき豊浜ちょうさ祭を宣伝することは、ちょうさ会館とならび、地域住民に豊浜の祭りへの自負心を意識づける契機になったと考えられる(<図5>)。



<図4> ちょうさ会館(実寸大のちょうさ以外に、上映スクリーンで祭礼を紹介し、練習用の太鼓などによる体験型展示も導入している：筆者撮影)



出所：ちょうさ会館より提供

<図5> 「第9回国民文化祭みえ94」での様子

祭礼の活用や運営体制の整備が進められたのが90年代だと振り返るならば、続く2000年代は、そうした活動が硬直化した時期であった。要因の一つは、05年に行われた観音寺市との合併である。この合併に関する協議が進行する過程で、さぬき豊浜ちょうさ祭への補助金削減が議題にあがる。財政上の課題や、市域に同種の祭礼が並立するなかでの公平性の確保がその理由となる。そこで03年、豊浜町内で「さぬき豊浜ちょうさ祭実行委員会」として新組織を立ちあげ、あらためて祭礼運営上で各種団体の協力を得るための動きが起きる。

実行委員会は、資金調達や宣伝事業において成果をおさめ、04年以降も継続的に活動を実施するが、盛り上げる会とは別個の組織となるため、運営に関する指揮系統が二分化する事態をまねき、例年通りの開催を目指すという消極的な祭礼実践に転じていく。この状況の変革を試みるために、05年より、ちょうさを使用した演技を洗練し、期日中に新たな見せ場を創出する活動に着手したのが、和田地区の住民によって結成された五十鈴會である。

ボトムアップ的に祭礼の活性化にむけた取組みが行われだし、盛り上げる会・実行委員会でも17年に組織体制を刷新する動向があった。簡潔に示すと、各ちょうさの運行責任者による実施部会を創設し、また各自治会代表者の協議によって運営方針を決定するという変更で、それは盛り上げる会と実行委員会を一元化し、運営能力の回復を企図する内容であった。以上の変遷を経て、現在のさぬき豊浜ちょうさ祭が行われているわけである。

### 3. 「豊浜ちょうさ祭を盛り上げる会」の活動

#### 3.1 盛り上げる会の活動履歴

ここからは、さぬき豊浜ちょうさ祭の運営組織に焦点をあてていく。まず本節では、1989年に組織された、豊浜ちょうさ祭を盛り上げる会についてとりあげる<sup>9)</sup>。

盛り上げる会の発足は上述した年となるが、その前身集団に相当する有志らの活動が60

9) 本稿では、盛り上げる会の会則にしたがい、それが施行された年を発足年と設定した。しかし以前、筆者が同祭礼について報告をまとめた際は、聞きとり内容にもとづき、1985年を発足年としていた(倉田 2017: 46)。祭礼運営組織に前段階に位置づけられる活動履歴がある場合、活動開始時期と会則・規約の制定時期が一致しないことがままある点は、留意しておきたい。

年代から続けられてきた。この前史的な活動からの沿革をたどるなかで、豊浜町の住民が、さぬき豊浜ちょうさ祭から地域アイデンティティを見出していく過程を確かめる。そして祭礼実践上の動作やかけ声、すなわち身体技法について豊浜の祭りと愛媛型との差異があり、そこに摩擦が発生している様子に言及する。

前身集団がつどった経緯は、祭礼の衰退への懸念であった。60年代は、同祭礼の中心的な担い手となる若年層を中心に、豊浜町からの人口流出が進み<sup>10)</sup>、運行されるちょうさの台数も減少を示した時期だった。そこで、この衰退に歯止めをかけようと、町内の有志で祭礼を盛り上げるための活動がはじめられていく。

活動の最初期からたずさわっていた古老A氏は、「だんだんとお祭りが廃ってきてな、寂しくなってきたんや。これではいかんというんで、それから(活動に)力をいれた<sup>11)</sup>」と回想する。この「廃ってきて」という表現は、今述べた、ちょうさを保有する各自治会が祭礼での運行を控える状況を指す。この状況の打破が、前身集団の活動目的だったが、そこでは、ちょうさに装着されている、掛布団、幕、締といった飾り物の新調をうながす戦術が採用された。というのも、A氏が「(祭礼を盛りあげる)そのためにはな、古い飾り物をどっかささらに(新しく)せんと<sup>12)</sup>」と語ったように、ちょうさを祭礼の場にださせるためには、新調した部位を「見せる」ように誘導する、つまりその披露をうながすことが、もっとも効果的だと考えられたからである。

戦術が成功をおさめた一例をみてみよう。A氏の所属する自治会(町内会)では、「(有志の)5人が金をだして(新調した飾り物を)もちあうんぞということで、きめて動いたんよ。そしたら、町内会が(新調費を)ださんわけにはいかんくなった<sup>13)</sup>」と語っている。要点は、飾り物の新調の段取りを有志で進め、具体的な予算と発注先をとりまとめた時点で、新調の承認を自治会に談判した箇所にある。つまり、自治会の承認を見越したうえで、有志で一芝居をうち、ちょうさの新調を促進したわけである。

このような活動が展開されるなかで、装いも新たにしたちょうさが、再び祭礼に登場しはじめる。とくに、70年代の須賀、本町ちょうさで行われた飾り物の新調は、ちょうさの所有も含めて、豊浜町内に競争意識を芽生えさせる契機となり、70年時点で16台だった

10) 1955年、現在の四地区を単位とする新町政が発足したとき、豊浜町の人口は11,881人だったが、高度成長期を挟んだ70年には10,235人に落ち込む。このときに減少した主な年齢層が、従属人口から34歳までの若年層であった(豊浜町編 1996: 13-16)。

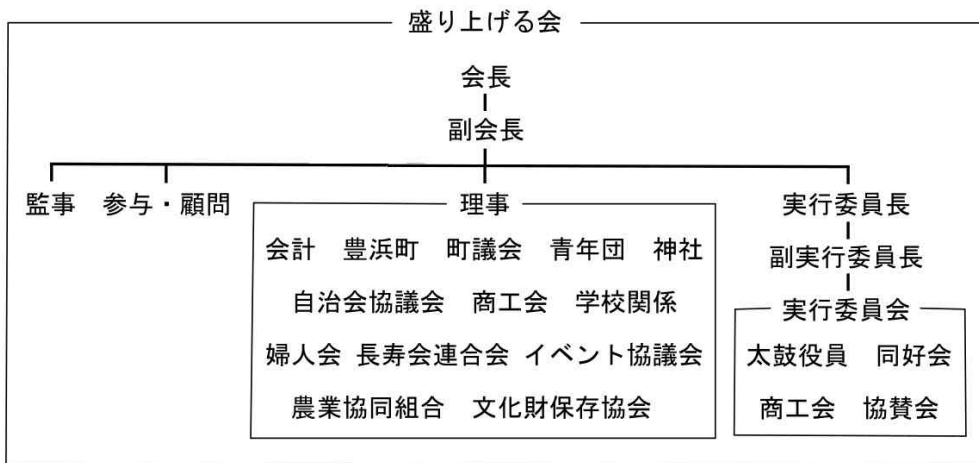
11) 元・豊浜ちょうさ祭を盛り上げる会役員・A氏(90代・男性)への聞きとりによる(2018年1月8日)。

12) A氏(90代・男性)への聞きとりによる(2018年1月8日)。

13) A氏(90代・男性)への聞きとりによる(2018年1月8日)。

ちょうさを(豊浜町 1992: 26)、現在の23台に増加させるきっかけとなった。

台数の増加によって、祭礼は活気をとりもどす。しかし今度は、ちょうさ運行において、予定時刻の遅延や御旅所の入退場時のいさかいといったトラブルが多発するようになる。加えて、一宮公園グラウンドで合同運行する際の申し合わせや、警備員の配置、駐車場の設置といった周辺環境整備も問題となった。そこで、これら一連の課題解決を通して、ちょうさ運行の円滑化や祭礼のさらなる活性化を目指すため、正式に盛り上げる会を発足する運びとなったのが89年の出来事である(<図6>)。



出所：「豊浜ちょうさ祭を盛り上げる会会則」より筆者作成

<図6> 豊浜ちょうさ祭を盛り上げる会・組織図

<図6>をみると、発足時の会則では、豊浜町(町長・助役・収入役)をはじめ、自治会協議会、商工会、青年団、婦人会等、同町の主だった団体の代表者が盛り上げる会を構成している。上述した各課題の解決にむけた体制を敷くとともに、ちょうさ会館の建設や派遣事業による、祭礼の活用を念頭に置く組織だったことがわかる。盛り上げる会の下部組織を確かめると、各自治会の太鼓役員<sup>14)</sup>、商工会(活性化協議会)、同好会(刺繍・彫刻)、協賛会(趣旨協力者)からなる「実行委員会」がもうけられており、ちょうさ運行に関する意見交換

14) たとえば、東町ちょうさを所有する東町自治会では、「太鼓維持部長」という役職が設けられ、年間を通してちょうさの維持管理の役割を担っている(倉田 2017: 44)、このような人物の選出を想定できる。

の場も確保していた。

こうして、豊浜町をあげて祭礼を開催する地盤が築かれたわけだが、その活動内容の分析に先立ち、93年の盛り上げる会における議事録をみてみたい<sup>15)</sup>。同年の祭礼前に開かれた会議は、まず前年に提出された反省点の協議からはじまる。合同運行時の時間管理や安全対策など、同会の発足理由にもつながる反省点がならぶなか、太鼓の打ちかたとかけ声の「悪さ」、すなわち祭礼中の身体技法を問題視する意見があり、他の項目に比べてその箇所に紙幅が割かれている。

内容をたどると、それらの身体技法で悪さとしてあげられていたのは「愛媛のような」打ちかたやかかけ声で、「どうしたら、豊浜ちょうさ祭の伝来として申し合わせていけるか」とある。それは、盛り上げる会のなかで、愛媛型から讃岐型への修正をうながす意見が主流だったことを示唆する。つまり、伝承されてきた型にもとづく祭礼実践を、豊浜の祭りの望ましい姿として再確認することが、全時的な会合の場でなされていたのだといえよう。

加えて、ちょうさ派遣を通して、さぬき豊浜ちょうさ祭という通称が推しだされていくことも、留意すべき点となる。盛り上げる会の活動にたずさわってきたB氏が、「(近隣地域に)同じものがあるなかで、どう盛りあげるか<sup>16)</sup>」と語ったように、観音寺市域だけでも117台のちょうさがあり、23の祭礼が行われている<sup>17)</sup>。同種の祭礼が数多く存在するなかで、とりわけ代表的だという名声を獲得することは、祭礼の対外的な発信を目指すうえで重要であった。そこで「さぬき豊浜」と地名を挿入し、名称による近隣地域との差別化をはかった後に、先述した県内外へのちょうさの派遣が行われてきた経緯をうかがえる。

### 3.2 祭礼の活性化と望ましい姿の提示

以上が、盛り上げる会の活動内容となる。この運営組織が果たした役割は、ちょうさ運行の統制や祭礼の広報、ちょうさの対外派遣を通して、さぬき豊浜ちょうさ祭を今日知られている、豊浜町をあげた祭礼として整備したことに求められる。しかしそれは、豊浜町という地域社会にどのようなインパクトを与えたのだろうか。

その影響について、まず地域アイデンティティの観点から考察を加えると、祭礼を活性

15) 元・豊浜ちょうさ祭を盛り上げる会役員・B氏(60代・男性)提供資料「平成5年豊浜ちょうさ祭を盛り上げる会 協議事項」による。

16) B氏(60代・男性)への聞きとりによる(2019年4月19日)。

17) 観音寺市(2019)「市内のちょうさ祭開催日程(令和元年)」観音寺市役所(2019年10月1日取得, <https://www.city.kanonji.kagawa.jp/soshiki/21/364.html>)

化する過程で、さぬき豊浜ちょうさ祭と命名されたことが、地域住民にどう受けとめられたかという点が重要になる。

それを紐解くうえで、県内外の祭典にちょうさを派遣した90年代の営みは注目に値する。観音寺市域を含め、香川県西讃地域から愛媛県東予地域にかけて、ちょうさ、あるいは類似した屋台を使用する祭礼は数多くある。そのなかで派遣事業を展開し、祭礼の名称を推しだす行為は、名前の強調がアイデンティティを喚起すると指摘した、エンゲルの議論に適合的である。すなわち、ちょうさの派遣とともに、地域を誇示する祭礼名を世に示すことは、祭礼に関連づけながら住民たちの地域アイデンティティを喚起する。同時に、派遣という広報活動は先述の通り、代表的な祭礼という名声を獲得する戦略としても有効であった。

また、ちょうさ運行上のトラブルが、運営組織を必要とするまでに問題化した時期と、さぬき豊浜ちょうさ祭と命名された時期は並行しているが、この名称の浸透はトラブルの解決にも有効に働いたようである。再度、A氏の言をとりあげると「(命名にあたって)「さぬき豊浜」いうのをつけたのはよかったと思う。それまではなかなかまとまって(合同運行)できなんだ<sup>18)</sup>」という。つまり、この名称下で行われた盛り上げる会の取組みは、組織化で目指された円滑な合同運行に担い手をいざなうものでもあった。それは、豊浜町を単位とする連帯感の強化に寄与したと表現することもできよう。

次に、祭礼実践に対する地域住民のテストである。盛り上げる会の前身集団にさかのぼると、彼らは元々、ちょうさという物質面の新調を推進していた。たとえば、前節の<図2>で説明すれば、ちょうさの上半分に装着された部位や飾り物である<sup>19)</sup>。その推進に際して、統一性を保持するような働きかけはなかったようだが、今日、祭礼にでる23台ともに、これらの形状が統一されており、飾り物を装着する木製部分の構造も、大型化という変化はありながらも従来の形状を維持している。しかし、かけ声や太鼓の打ちかたといった身体技法は、必ずしもそのようにはならなかった。

先ほど、盛り上げる会の場合、豊浜に伝わる身体技法を再確認する場にもなっていると述べた。太鼓の打ちかたとかけ声のいずれも、ちょうさを動かすうえでの基本的な指示になるが<sup>20)</sup>、もう一つ、ちょうさの独自性を強調する側面も、これらの身体技法に備わって

18) A氏(90代・男性)への聞きとりによる(2017年8月10日)。

19) 部位とは、ちょうさ頂点の四隅にかかる丸みをおびた「とんぼ」と、その下部をささえる「七重」、飾り物は、七重の表面にかけられた龍型の「縮」、その下にまかれる「金縄」等が該当する。ほかにも、中央部にある「掛布団」も、概ね統一された形状を保っている。

20) ちょうさ会館に展示されている資料「太鼓の打ち方」にそって簡潔に説明すると、歩くときは4拍4秒4

いる。

再度、反省点を協議する様子を取りあげると、その席上で太鼓の打ちかたとかけ声の悪さにあげられたのは、愛媛のような打ちかたやかかけ声であった。これは、いわば愛媛型という表現の流入を牽制する文言といえ、その指摘後に「各自治会で責任をもって、直していくようにすること」、そして「どうしたら、豊浜ちょうさ祭の伝来として申し合わせていくか」と続いている。同時期のちょうさ会館では、この太鼓の打ちかたに関する講習が、祭礼前に開かれていたわけだが、これらを勘案すると、愛媛型の表現がもつ影響の大きさとともに、愛媛型と讃岐型を両極とした豊浜の祭りにおける「良い/悪い」への感覚、すなわち望ましい姿をめぐるテイストの存在が浮上する。

打ちかたやかかけ声に対する提言は、「豊浜の祭りであり、他の地区の祭りではないので、自治会の責任で、豊浜の祭りにしてほしい」と結ばれる。これらを総括すれば、盛り上げる会の活動の柱は、祭礼の整備と派遣事業の展開にあった。その過程で、さぬき豊浜ちょうさ祭という通称を推しだしたところ、それが住民たちの地域アイデンティティを喚起し、環境整備と派遣事業の双方から、祭礼の活性化に成功する。他方で、協議の場を通じた祭礼実践上の望ましい姿の提示は、テイストの争点化という状況を生みだした。この状況が定着した後、和田地区を単位とした新たな運営組織、五十鈴會が発足する。

## 4. 「五十鈴會」による新たな試み

### 4.1 五十鈴會の沿革と活動の展開

今述べたように、本節では和田地区の住民が結成した運営組織、五十鈴會の沿革をたどりつつ、その活動の影響について検討を加える。

五十鈴會結成の動機は、2004年8月から10月にかけて発生した台風15号、21号による土砂災害に求められる。二つの台風は、豊浜町に死者3名、負傷者数十名という人的被害のほか、河川の氾濫や道路を寸断する事態を生み、とりわけ農業を担う和田地区に深刻な被害をもたらした。この復興作業時の取組みの一環として、同地区を鼓舞するためにちょうさ

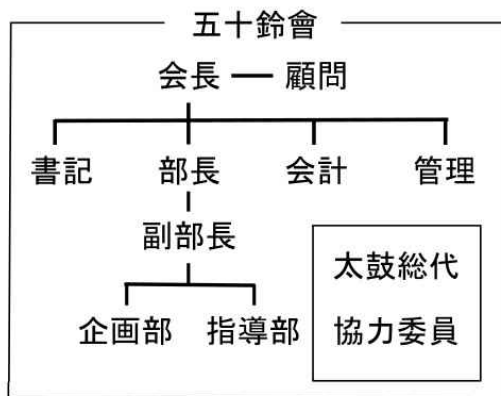
---

分音符程、担ぐときは8拍4秒(8分音符)程、走るときは16拍4秒(16分音符)程のテンポで太鼓を打つ。そのテンポにあわせて、かけ声もまた変化する。このかけ声の詳細は次節で説明したい。

を活用しようとする動きが起きたのが、05年の出来事である。

具体的には、地区内のちょうさ責任者が集まり、協議したうえで、二日目に「担きじょう」と呼ばれる和田お祭り広場の会場で、和田地区9台のちょうさが統一演技を催す内容となり、その試みを実行にうつすため、同年に「和田イベント実行委員会」という名称下で活動をはじめ。だが当時は、五十鈴會を立ち上げたC氏が「4台や5台集まったら、やっぱり自分らの太鼓台がファーストの意見になってくる<sup>21)</sup>」と語るように、他のちょうさと歩調をあわせて演技を催す習慣がなく、その実践への困惑が地域住民のなかにもみられた。したがって、9台の団結も現在ほどではなかった。

その後、神輿のお供として奉納する存在がちょうさで、それを使用する団体名にイベントを用いることに違和感を覚える声があがる。そこで07年、和田地区で祀る「五十鈴神社」の名をとって五十鈴會と改称、ここから組織的な活動が本格化した。現在の組織構成は、会長以下の役員、太鼓総代(各ちょうさの代表者)、指導部、企画部、協力委員となる<sup>22)</sup>(<図7>)。このうち、改称時から重要な役割を果たしていたのが指導部で、統一演技にむけて協力体制を構築してきた。



出所：「五十鈴會会則」にもとづき筆者作成

<図7> 五十鈴會の組織図

そして同年、統一演技について重要な改編がはかられる。ちょうさのかけ声や太鼓の叩きかたなどの身体技法があることは先述した。改編とは、伝承されてきたかけ声にあわせ

21) 元・五十鈴會役員・C氏(50代・男性)への聞きとりによる(2017年6月11日)。

22) 五十鈴會役員・D氏(30代・男性)提供資料「五十鈴會会則」にもとづく。



て、数台のちょうさを一斉に差しあげる「合同寄せ担き」という演技ができるよう、独自の身体技法が編みだされたことである。この創作にたずさわった五十鈴會役員E氏は「今まではこう、走ったりするときとか、勢いつけるときとかに、ドッコイマカシタ、それでチョウホイ、チョウホイっていう(かけ声が使われてきたが、それらを)そのまま太鼓に……担きじょう(合同寄せ担き)のかけ声にした<sup>23)</sup>」と語っており、従来のかげ声を基礎においた創作であることが強調されている。この新たな身体技法にもとづく練習を各ちょうさで重ね、それを担きじょうの場で披露したところ、和田地区内では大きな好評を博した(<図8>)。



<図8> 担きじょう(合同寄せ担き)の様子(筆者撮影)

「みんなで地域の全体を盛りあげましょうよっていうことに、もっていったんやから、それは本当に大変やったと思う<sup>24)</sup>」とは、同地区の住民でちょうさにもたずさわるF氏の回想である。実際、合同寄せ担きを成功にみちびくうえで、指導部以外にも、ちょうさを所有する各自治会と五十鈴會との仲介役を協力委員が担う状況があった。これら一連の活動が実を結び、C氏が「ターニングポイント<sup>25)</sup>」と表現した、ちょうさ9台の担い手たちの協力姿勢や団結心を強化する端緒となったわけである。

統一演技を介して、担い手同士、あるいは担い手と地区住民とのコミュニケーションがはかられだし、五十鈴會の活動が軌道に乗った09年には、同会の呼びかけで、祭礼三日目

23) 五十鈴會役員・E氏(30代・男性)への聞きとりによる(2017年6月11日)。

24) 和田地区ちょうさ関係者・F氏(60代・男性)への聞きとりによる(2017年3月29日)。

25) C氏(50代・男性)への聞きとりによる(2017年3月29日)。

の午前10時から、五十鈴神社で合同参拝が行われるようになる。ここでは、「五十鈴神社合同参拝の企画設営をする者<sup>26)</sup>」である企画部が、地区内の氏子総代たちと参拝の準備を進める。神社は、台山の中腹に鎮座しており、そこまでちょうさを担いで奉納したという伝承を踏まえて、合同参拝ではちょうさ9台を山沿いの道路に集め、個々の水引幕を拝殿にかざり、和田地区としての神事を行う(<図9>)。神事が終わり、水引幕をつけなおした9台は、神社から和田お祭り広場に移動し、船渡御にむかう神輿の儀礼に立ち会う。その後、一宮公園グラウンドでは、主に和田地区のちょうさが、先の身体技法を応用した個別演技を披露し、いわば「見せる」祭りを意識した活動を展開している。

祭礼期日中、和田地区を会場に見せ場を演出することが五十鈴會の活動内容といえるが、それ以外にもいくつかの取組みがある。たとえば11年、東日本大震災の被災地支援としてチャリティーイベント「絆」を開催し、16年には、本来の例祭日を4月10日とする五十鈴神社へのちょうさ奉納を行っている。ただ、本稿に関連する取組みとしてあげるならば、07年につくられたかけ声、担ぎかたの指南を通して、他の地区のちょうさとも交流をもつようになった点は、「見せる」意識と身体技法の結びつきを考察するうえで重要であろう。



<図9> 五十鈴神社に水引幕をもちよる様子(各ちょうさを代表する参列者の奥に、それぞれの水引幕がかざられている：筆者撮影)

26) 「五十鈴會会則」にもとづく。

## 4.2 望ましい祭礼の追求

前節でとりあげた盛り上げる会は、豊浜町を単位とする祭礼運営組織であった。この全町的な運営組織の低迷期に、町内四地区のうち、和田地区を単位とする五十鈴會で新たな活動が開始されたわけだが、同会の活動のうちターニングポイントとあった、2007年の合同寄せ担きという統一演技は、2000年代以降のさぬき豊浜ちょうさ祭の変容をたどるうえで注目すべき出来事になる。この演技の創作が、いかなる重要性をもっていたのか、地域アイデンティティとテイストの両概念にもとづいて検討する。

和田イベント実行委員会として活動がはじまった05年は、盛り上げる会が進めてきた、さぬき豊浜ちょうさ祭の名称と整備された会場での演技が定着した時期でもあった。ただ、当時についてC氏は「さぬき豊浜ちょうさ祭っていう名前に、みんながおんぶにだっこやないけど……ただ一番やというふうに思う。ほんまに、それでええんかなって<sup>27)</sup>」と吐露する。担い手自身がいなく、祭礼への自負につりあう実践をしているのか、会場にいる人々は楽しみを共有できているのか、それらを再考する語りである。つまり、07年の合同寄せ担きは、いわば担い手が内省的な視点にたつて祭礼を捉えなおし、その望ましい実践を目指して選択したことがわかる。

合同寄せ担きという統一演技の成功後、まずは五十鈴會内部での結束が強まり、実際に演技をみた和田地区の住民からも好評を得たことで、同会に対する地区内での懐疑的な見方が沈静化し、ひいては支持にもつながっていく。この支持がなければ実行に移せなかった出来事が、続く09年における五十鈴神社の合同参拝という、地区内での神事の再開になる。統一演技は各ちょうさの協議で行えるが、神社の使用については、氏子総代や世話人をはじめとする、地区住民の賛同が必要不可欠なためである。

つまり、地域アイデンティティという概念から合同寄せ担きを捉えなおせば、そこで醸成されたのは、豊浜町和田地区住民としての連帯感だと、まず述べられる。盛り上げる会によって定着した、目立ったトラブルのない合同運行の時間と、さぬき豊浜ちょうさ祭という名称が、豊浜町を単位とする地域アイデンティティを住民に喚起した。そうだとすれば、地区で一致団結した統一演技を催すことで、元来、重層していた和田地区の一員という小単位の地域アイデンティティの強化を地区住民にうながしたのが、五十鈴會であった。

27) C氏(50代・男性)への聞きとりによる(2017年3月29日)。

ただし、合同寄せ担き自体は、目下のところ和田おまつり広場が御旅所となる二日目の夕刻、担きじょうの場のみで催されている。この現状についてC氏は「やる側(他の三地区に属するちょうさ)の考えと、今五十鈴会が取組んでいきよるなかに、どうしてもギャップがある<sup>28)</sup>」と憂慮する。「ギャップ」とは、いわば「見せる」祭りに対する、担い手間の温度差を指す。合同寄せ担きを成功させるには、複数のちょうさの動きを統一する必要がある、一宮公園グラウンドでの個別演技も、太鼓の打ちかたやかかけ声のタイミングの洗練が成否をわけるため、いずれも祭礼前からの練習を要求される。

F氏が「お祭りやから当然、そこに参加する人たちが一番楽しまないかん<sup>29)</sup>」と話した、担い手が素朴に共有する意識に照らすと、上述した五十鈴会の取組みは、新たな楽しみかたの提案として好意的に解釈することができる。他方、統一演技や個別演技の洗練といった習慣がないなかに現れた話として、担い手が当惑することもまた想定できる。だからこそ、その取組みに対するギャップが、担い手間に生じたのだと指摘できる。

しかしながら、ギャップという言葉が示唆する温度差はそれだけではない。テイストを踏まえて論じるならば、それは合同寄せ担きに際して創出された、元々のかけ声を踏襲しつつ差しあげるという一連の動作に求められよう。これまでの祭礼では、たとえば、一宮公園グラウンドで複数のちょうさが曳きまわし、差しあげを披露する場面は一つの見せ場を構成していたが、<図8>でみたような、数台で統一して差しあげを披露する演技はなかった。こうした統一演技の場合、横ならびとなる各ちょうさをいかに安定させ、同時に動かせるかという点が成否をわける鍵となる。ここで重要な役割をもつのが、ちょうさの棒上に立ち、下の担ぎ手らに動作を伝達する指揮者だが、この指揮者が統率し、太鼓とかかけ声にあわせて差しあげる実践形態をたどれば愛媛県新居浜市、すなわち愛媛型という表現に行きつく。

先ほど言及した、一宮公園グラウンドにおける個別演技も確かめると、<図3>のように、差しあげた体勢からさらに放り投げという動作を加える場合がある。約2トンのちょうさを文字通り真上に放り投げる演技で、棒から手が離れるタイミング、また直後の落下を受ける体勢がそろっていないければ、ちょうさの転倒という危険な事態をまねくおそれもある。そのために統一演技同様、指揮者の統率が重要となるわけだが、このように単体のちょうさで「見せる」祭りを意識した技を練りだすこともまた、豊浜に伝わるかけ声を組込み、編みだした身体技法を基礎に置くものとはいえ、前節で記した愛媛のような祭りを衍

28) C氏(50代・男性)への聞きとりによる(2017年3月29日)。

29) F氏(60代・男性)への聞きとりによる(2017年3月29日)。

佛とさせる実践だったといえよう。少なくとも、そのように受けとって否定的な見解を示す地域住民がいるからこそ、活動から10年を経てもなお、「どうしてもギャップがある」現状にあることを想定できる。

つまりこれまでの議論から読みとれるのは、豊浜の祭りの望ましい姿を模索する過程で表出する緊張関係である。盛り上げる会の発足以降、さぬき豊浜ちょうさ祭は豊浜町をあげた祭礼だというイメージが地域住民のなかで強まりをみせる一方、祭礼中のちょうさ運行が、豊浜に伝承されてきた身体技法にかなうものか否か、それを判断するテイストもまた地域住民に意識づけられてきた。こうした状況の延長上ではじまった、五十鈴會による統一演技と身体技法の創出は、さぬき豊浜ちょうさ祭についてボトムアップ式の活性化に寄与するとともに、「見せる」方法として愛媛型に接近した動作を導入することで、地域住民がいただくテイストを大きく刺激したと述べられる。それは、讃岐型を重視する人々に対して、あらためて否定的な見解を生じさせることになったものの、他のちょうさへのかけ声、担ぎかたの指南という活動の展開にうかがえるように、より望ましい実践を求めて行動を起こす能動的な担い手を、豊浜町内に増やすことにもつながったのだと総括できる。

担い手となる地域住民が、地域と祭礼に肯定感をもつことは、確かにその維持や継承を意識し、結束をはかる端緒であることは違いない。ただ、住民らにとっての思い入れが強いほど、実際に起こした活動を評価する過程において葛藤が発生する。つまり、この地域アイデンティティとテイストをめぐる葛藤は、片側が強化されればもう片側も同様に強まる関係にあって、切り離して考えることはできない。だからこそ、この緊張関係にあらわれる諸要因をつぶさに検討することは、冒頭で述べた祭礼の持続可能性を探求することにもつながるといえる。この観点を提起できたことをもって、本稿の意義とすることができよう。

## 5. おわりに

以上、さぬき豊浜ちょうさ祭の運営にたずさわる組織の沿革とその活動について、地域アイデンティティの具体化と、祭礼実践におけるテイストという観点から分析した。

整理すると、祭礼にでるちょうさの減少を止めようと、1960年代から有志で展開してきた活動は、ちょうさを再度ださせることに貢献する。そして逆に、台数の増加によって運

行上のトラブルが生じはじめたことが、盛り上げる会発足の経緯であった。この組織化を契機に、ちょうさ会館の建設や県内外へのちょうさ派遣など、大規模な活動を展開する。そして、さぬき豊浜ちょうさ祭という名称が推しだされるなかで、住民の地域アイデンティティが喚起される。また、全町的な会合の場がもうけられることで、愛媛型の表現を対極とした、豊浜の祭りにいづく「良い/悪い」への感覚、すなわちテイストが地域住民のあいだで争点化されることになった。

2000年代には、和田地区で五十鈴會が発足、地区内9台のちょうさが和田お祭り広場を会場として、合同寄せ担きという統一演技が催される。これが成功をおさめることで、豊浜町和田地区という、小単位の地域アイデンティティが強化され、その連帯感にもとづく新たな祭礼実践を展開していく。従来以上に「見せる」ことを重視する取組みにむけて編みだされた身体技法は、愛媛型に接近した動作をとまなうもので、あらためてテイストをめぐる緊張関係が発生する。だがそれは、否定的な見解だけではなく、その身体技法を選択して実践にのぞむ、いわば能動的な担い手を生み出すことにもなり、祭礼をボトムアップ式に活性化することに寄与した。

これら両組織の活動結果に関する共通点に、祭礼を通じた地域住民への共属感情の喚起をあげられるが、それは先行研究を説明するなかでふれた竹沢の指摘と一致する。再掲すると、祭礼が社会統合を果たすという議論は、デュルケム以来の祭礼研究上で一つの基調をなしてきたという点である(竹沢 1999: 81)。この観点から、さぬき豊浜ちょうさ祭もまた、豊浜町をあげての営みと位置づけられ、祭礼実践によって人々のあいだの連帯感が育まれたと述べられることは、本論で詳述した地域アイデンティティの形成過程から明らかであろう。しかし、もう一つの分析視角に用いたテイストから、祭礼実践のなかにみられる人々の感覚に着目したとき、そこからは、築かれた連帯感をもちあわせたうえで、豊浜の祭りの望ましい姿を追求する地域住民の葛藤が浮上してきた。

「運動の同質性が集団に自我を与え、したがって、集団を存在させる」(Durkheim 1912=1941: 415)ことは、祭礼を持続可能なものとする前提となろうが、加えて、この同質性のなかに人々が感じとる差異が、望ましい同質性を考える契機になる。運動、すなわち祭礼実践上の身体技法がまったくの同質ではないからこそ、かえってそこに人々が議論する余地が生じる。いいかえるならば、同じ祭礼を行う地域住民がみせる葛藤的な営みにこそ、祭礼の継承を喚起する機能を確認できるわけである。

ところで、本論で中心的にあつかってきた、祭礼実践の円滑化やその活性化を目指す動向は、戦後、運営組織の編成や祭礼時間、屋台等の運行様式の変化をとまなう出来事とし

て、全国的に確認できる。では、こうした変遷を経て、各祭礼の現在はどのような姿をみせているのだろうか。

いくつか事例を示すと、東京都府中市の大国魂神社くらやみ祭の場合、1950年代から60年代にかけて、市民誰もが楽しめるように「昼間の祭り」に変更され、今度は2002年に夕刻以降に神輿渡御時間をもどされたことをもって、人々がいかに「自らの望む祭礼」を行おうとしているのかを指摘した(中里 2010)。大阪府岸和田市の岸和田だんじり祭では、戦後から1970年代前半にかけて、暴力への規制に対応するため、だんじりと呼ばれる屋台の運営組織である「年番」の強化がはかられ、70年代後半以降は、走るだんじりを勢いよくまげて運行する「やりまわし」のスポーツ化が進行し、「見せる」祭りとしての評価を獲得していく(有本 2017)。

このように、祭礼実践の円滑化やその活性化を目指す動向と、一言で述べたとしても、各祭礼の組織編成の経過や描きだされる祭礼実践、その背景をなす地域的課題には、共通性もある反面、異なる要素も多分にみうけられる。第4章の最後に述べたように、祭礼で生じた緊張関係にその持続可能性を発見するという本研究の観点は、上述した、自らの望む祭礼の追求やスポーツ化という競争の進行によって祭礼を維持していくという、現代の祭礼研究上の議論に新たな切り口を提起した点でも意義があろう。

とはいえ、本研究における限界や残された課題は当然ある。本事例のなかで重要な位置を占めるのは、愛媛型とよばれる太鼓台(ちょうさ)で用いられている身体技法で、それは先行研究でふれた「支配的な美学」に相当するものだと論じた。この「愛媛を彷彿とさせる」様式が、五十鈴會、盛り上げる会以前にはどう豊浜町内で伝わっていたのか、またもたらされてきたのかについては、かならずしも明らかにはできていない。こうした伝播が、担い手個々人の交流からおきると想定した場合、それは組織レベルに焦点をあてた手法における限界といえよう。そのため、愛媛型の太鼓台、ならびに身体技法の伝播にさいして、香川県下の各祭礼では何を契機に、どのようなネットワークを創出しているのか、そして愛媛型をとり入れた各祭礼が、具体的にどう変容したのかを確かめることは、各祭礼の継承戦略におよぼす影響力を考えるうえでも求められるべき研究上の課題となる。本事例も参照しつつ、別稿であらためて論じることができればと考える。

**謝辞** 本稿の執筆にあたって、豊浜ちょうさ祭を盛り上げる会、五十鈴會の方をはじめ、調査地である豊浜町の方々からは、多くのご助力をいただいた。ご多忙のなか、筆者の拙いインタ

ビューにおつきあいくださり、貴重な資料をご提供いただいたこともそうだが、常に励みとなる言葉をかけてくださることに、何よりもありがたみを感じた次第である。この場を借りて、皆様に心からお礼を申し上げる。

## 【参考文献】

- 有本尚央(2017)「都市祭礼における「暴力」と規制——「スポーツ化」する岸和田だんじり祭」『フォーラム現代社会学』(16)、pp.59-71
- 植木行宣(2001)『山・鉾・屋台の祭り——風流の開花』白水社
- 岡澤康浩(2017)「テストはなぜ社会学の問題になるのか——ポピュラーカルチャー研究におけるテスト概念についてのエッセイ」、北田暁大・解体研編『社会にとって趣味とは何か——文化社会学の方法規準』、河出書房新社、pp.21-44
- 観音寺太鼓台研究グループ編(2013)「太鼓台文化の歴史」観音寺太鼓台研究グループ
- 北田暁大(2017)「社会にとって「テスト」とは何か——ブルデューの遺産をめぐる一考察」、北田暁大・解体研編『社会にとって趣味とは何か——文化社会学の方法規準』河出書房新社、pp.45-127
- 金賢貞(2013)『「創られた伝統」と生きる——地方社会のアイデンティティ』青弓社
- 倉田健太(2016)「現代の地方都市における神社祭礼の実践——坂出八幡神社秋季例祭を事例として」『香川地理学会会報』(36)、pp.40-53
- 倉田健太(2017)「香川県西讃地域での山車祭礼について——豊浜八幡神社秋季例祭の事例」『香川地理学会会報』(37)、pp.33-51
- 倉田健太(2019)「太鼓台が地域社会の意識を刷新する——「新居浜太鼓祭り」探訪、稲賀繁美編『映しと移ろい』花鳥社、pp.153-183
- 竹沢尚一郎(1999)「はじめに(ワークショップ(3)都市祭礼研究の課題と可能性)」『宗教と社会』別冊、pp.80-82
- 豊浜町(1992)『さぬき豊浜ちょうさ祭』豊浜町
- 新居浜市(1998)『平和な太鼓まつりシンポジウム 報告書』新居浜市
- 俵田悟(2017)「民俗資料としての「審美の基準」へのアプローチ——鹿児島県いちき串木野市、大里七夕踊りの事例から」『国立歴史民俗博物館研究報告』(205)、pp.435-458
- 中里亮平(2010)「変更からみる祭礼の現代的状況——東京都府中市大國魂神社くらやみ祭の事例から」『日本民俗学』(261)、pp.120-153
- 野入直美(2017)「越境と地域アイデンティティ——沖縄県金武町を事例として」『社会学評論』67(4)、pp.448-465
- 増田研(2014)「「長崎地元民」の構築——東瀬町の竜宮船における担い手の継続性とアイデンティティの層」『文化環境研究』(7)、pp.40-48
- 三隅貴史(2017)「東京周辺地域の祭礼における「江戸前」の美学の成立——神輿会に注目して」『日本民俗学』(292)、pp.95-125
- 宮本節子・古川典子(2007)「地域アイデンティティの形成に果たすケーブルテレビの役割——旧神崎町コミュニティ・チャンネルを事例として」『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』(9)、pp.83-92
- 濱田琢司(2013)「郷土」、人文地理学会編『人文地理学事典』丸善出版、pp.312-313
- É.Durkheim(1912) *Les Formes élémentaires de la Vie religieuse, Le Système torémique en Australie, Paris.*(=1941) 古野清人訳『宗教生活の原初形態(上)』岩波書店



M.Engelke(2017) *Think Like an Anthropologist*, Pelican UK.

P.Bourdieu(1979) *La Distinction*, Éditions de Minuit.(=1990)石井洋二郎訳『ディスタンクシオン I』藤原書店)

---

논문투고일 : 2020년 04월 01일  
심사개시일 : 2020년 04월 17일  
1차 수정일 : 2020년 05월 11일  
2차 수정일 : 2020년 05월 15일  
게재확정일 : 2020년 05월 20일

---

## 地域住民のアイデンティティ形成と葛藤が祭礼の継承に果たす役割

倉田健太

日本の祭礼における実践形式の一つに、2016年、ユネスコ無形文化遺産に登録された山・鉦・屋台行事がある。本稿では、この屋台を使用した祭礼となる、香川県観音寺市豊浜町(旧・香川県三豊郡豊浜町)に位置する豊浜八幡神社で行われる例大祭、通称「さぬき豊浜ちょうさ祭」を事例とする。具体的な研究対象には、同祭礼の活性化を目指す取組みを進めてきた団体の「豊浜ちょうさ祭を盛り上げる会」と「五十鈴會」を設定する。そして、運営組織の活動が、同祭礼の戦後の変遷に対して与えた影響をとくに読みとれる、1980年代以降を中心に分析する。

作業では、「地域アイデンティティ」と「テイスト」、二つの分析視角を用いる。地域アイデンティティでは、両組織の活動が豊浜町という全域と、和田地区という小単位の連帯感を喚起したことを論じる。テイストでは、地域住民がもつ太鼓の打ちかたやかかけ声など、身体技法への感覚に着目し、喚起された地域アイデンティティにもとづき、実践上の望ましさを追求する姿勢を説明する。そこには、望ましさをめぐる地域住民の葛藤が浮上する。だが、その葛藤から能動的な担い手が現れ、祭礼を持続可能なものにしていく関係性が形成されることを明らかにする。

## The Role of Residents their Conflicts in the Succession of Festival

*Kurota, Kenta*

A typical festival in Japan is the “Yama, Hoko, Yatai, float festivals,” which has been registered as a UNESCO Intangible Cultural Heritage. In this article, we take the example of a festival using a yatai. It is the festival of the Toyohama Hachiman Shrine in Toyohama-Cho, Kannonji City, Kagawa Prefecture, and is also called the “Sanuki Toyohama Chosa Festival.” The subject of study is the festival management organization. We will analyze the influence of the activities of both organizations for the festival, focusing on the 1980s and beyond.

The concepts used in the analysis work are “taste” and “local identity.” The local identity confirms that the organization’s activities have strengthened the sense of solidarity. In terms of taste, the residents confirm their conflicts over the ideal way of practicing the festival, based on their sense of physical techniques. Then, it has become clear that the conflict created by the sense of solidarity among the residents forms a relationship that considers better practices to continue the festival.